

タラノキの育て方とタラノメ収穫時期の調整

佐 藤 瑛

タラノキの若芽はタラノメと呼ばれ、旬の香り高い山菜として多くの人々に親しまれています。道内の山野のいたるところに成育しているのがみうけられたタラノキですが、近年は乱獲がたたって身近な存在ではなくなり、また市場への入荷量も減少して高値を呼んでいます。

このようななかで、タラノメを栽培し、増収と品質の向上を図ろうとする試みがみられます。ここでは本州の先進地の取り組み事例などを交えながら、タラノキの育て方とタラノメ栽培について述べることにします。

タラノキの特性

(1) 分布と形態

ウコギ科タラノキ属。暖帯から温帯の山野に普通に生え、高さ2～4mの落葉低木。日本各地、朝鮮半島、中国東北部、ウスリー、アムール、サハリンに分布しています。

8月頃、茎の先端の葉心に散形花序の多数の小白花を咲かせ、幹は分岐することが少なく直立して、大小多数のとげをつけます。葉は枝先に集まって互生し、2回羽状複葉の長さ60～100cmとなります。葉柄の基部は茎を抱いていて、葉軸や支軸状にもとげがあります。

(2) 品種および栽培品種

タラノキのほかにシナタラノキ(中国産、落葉高木)、アメリカタラノキ(アメリカ中南部産、落葉高木)などの種があります。タラノキの品種にキモンタラノキ(葉に黄斑)、フクリンタラノキ(葉が緑白色)があり、また変種にメダク(全体にとげが少ない)、トゲナシタラノキ(枝にとげがない)、マルバメダラ(朝鮮産)があります。

タラノキは栽培の歴史が浅く、栽培品種(系統)として確立されたものは極めて少ないといえます。

栽培品種としては、山梨県農業試験場で開発された「駒みどり」「蔵王1号」「高根1号」その他があります。これらの栽培品種の特徴としては、とげが少なく、茎葉の色あい鮮緑色で、節間がつまって枝葉数の多いことがあげられます。

栽培の方法

タラノキは、あまり地質や土壌型に影響されませんが、土層が深く、孔げきが多く、腐植質に富み、排水が良好で、しかも日当たりのよいところが適地といえます。

タラノメ栽培には、露地による普通栽培、ハウスによる早出し栽培、葉を利用する夏出し栽培(抑制法)の3タイプがあります。また、タラノキの枝条を用いて季節に関係なく芽を発生

させるふかし栽培が、これらに加えられます。

(1) 山取り株の定植

タラノメ栽培を行うには、とげが少なく、芽に重量のあるものが作業上有利とされます。また耐寒性、耐病性を考えると、地元で自生しているものの中から選抜する方が賢明です。例えば、温暖な環境で育ったタラノキを導入した場合、生育条件が合わなかったり、突発的病害に見まわれることが予想されるからです。

山取りする時期は、休眠期に入る 10 月上旬から樹液活動の活発になる 4 月上旬までが適しています。根を傷つけないよう注意して行います。

(2) 苗木の養成

タラノキの増殖法としては、実生、さし木、株分け、根ざしが考えられますが、今のところ根ざし以外の方法では成績があがりません。苗木養成は根ざしによって行うのが容易といえます。

根ざし用の種根は、山取り株を畑で施肥管理したものから取ります。融雪と同時に、根を掘りあげ、長さ 15cm 程度に切り取っていきます。根の太さは 5 mm 以上あれば十分ですが、太いものほど萌芽が早くなります(図 - 1)。

種根は 1 年生幼木から 50 本程度、3 年生の大株からはおよそ 100 本は取れるでしょう。

苗床に完熟堆肥を全面に散布し、深めに耕耘して敷き込みます。うねを切って、用意した種根を株間 20cm くらいの間隔で、天地を間違えないよう斜めに並べて植えていきます(図 - 2)。

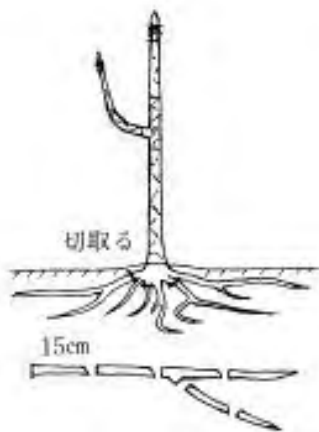


図 - 1 種根の取り方

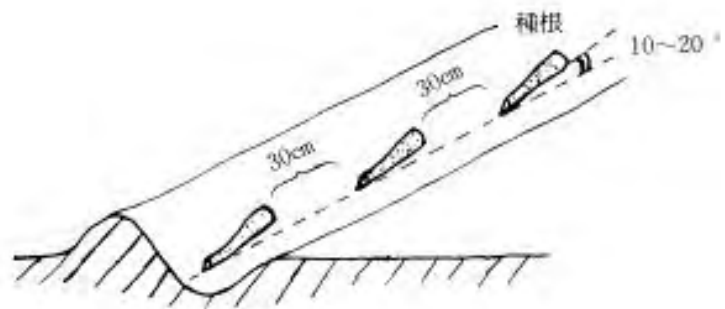


図 - 2 根ざしの植え方

覆土は 5 ~ 7cm くらいで地表面が乾燥しないよう敷わらを並べて、時々散水します。夏の除草も大切です。

植え付け後、およそ 40 日くらいで発芽します。苗床で 1 年経過したものを本畑へ定植します。

(3) 露地による栽培

露地栽培用の苗木は、山取り株からの根ざしで 1 年間養成したものを使います。それを畑に植え付けて、2 年目から画然萌芽してくる頂芽や側芽を取獲するものです。

また、後で述べるふかし栽培に必要な穂木の生産にも利用されます。

早春のうちに、畑地に直径 60cm、深さ 20cm の穴を掘り、けい糞、バーク堆肥等を入れ、直接根にふれないように植え付けます。湿地は嫌うので水はけに留意します。

タラノキは自然状態で 4 mにもなるので、収穫時の手間を考慮して、大人の背丈くらいの樹高でおさえることが必要となります。

植え付けた翌春から収穫を考えますが、2 年目は地上高 20cm くらいのところで、芽になる部分を 4 ~ 5 芽残してせん定します。それ以降は毎年その年に伸びた枝に 1 ~ 2 芽を残してせん定をくり返します。できるだけ枝の基部で切るようにします(図 - 3)。

せん定の時期が早過ぎると徒長してしまうし、遅すぎると枝の太りが悪くなり、収穫に影響しますので注意を要します。

タラノメは最初に頂芽が発芽し、次に上方から順に側芽が萌芽します(図 - 4)。

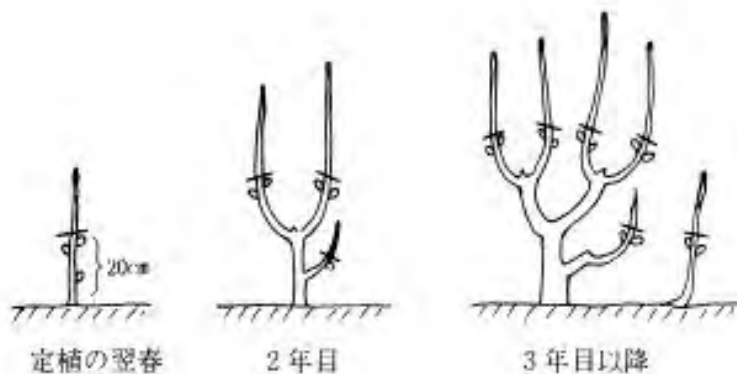


図 - 3 せん定の方法

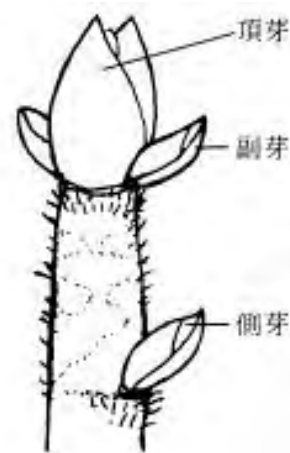


図 - 4 タラノメの名所

施肥は 2 年目から 10 a 当たり堆肥 1,200 kg 相当を入れてやります。

植栽から 5 ~ 6 年経つと、株高が高くなり、収穫作業も困難となるので、株を切り下げる作業を行います。

古株のまわりに幅 15cm、深さ 25cm の溝をめぐらし、横に伸びた根を 3 ~ 5 ヶ所切って、根の先から新しい茎を発生させます。この作業は、春の萌芽前から頂芽収穫の頃までに終わらせます。

タラノメの収穫は、頂芽で 10 ~ 12cm に伸びた新葉の開かないうちが最適で、品質もよく、収量も多くあがります。側芽は頂芽に比べて値段もさがるようです。

(4) 林地を利用した栽培

タラノキは林地の林縁や林道の法面を利用した栽培が可能です。

この場合も分根(根ざし)による増殖が有利です。

分根は秋の降雪前に親木の根を掘り取り、水洗いして、長さ 15cm 程度に切断して消毒保管するか、または直接林地へ植え付けます。寒冷地では凍結に注意します。

親木 1 本から約 30 本(径 5 ~ 10 mm) 以上は取れるでしょう。

翌春に植え付けますが、苗畑で 1 年養成した方がより効果的でしょう。

植え付ける林地は、陽光がよく当たる場所を選び、その後の生長を予想して 80~150cm 間隔にすかして植えます。6~8月の下草刈りを欠かせません。

幼木からのタラノメの収穫は、樹勢の衰えを考慮して半数くらいにとどめることが大切です。また、枝張りを多くするために、せん定をくり返し行わなければなりません。

(5) 促成栽培と抑制栽培

タラノメ栽培では、生産価値を高めて収益性につなげる工夫が必要となってきます。例えば《旬の先取り》といった考えで、ビニールハウス掛けによる早出し栽培促成型があります。または、高冷地や残雪のある沢あいを利用した夏出し栽培抑制型があります。いずれも露地栽培の応用型として取り組まれます。

早春の2月~4月にかけて早出し栽培を行う場合、収穫目標日の約1ヵ月以前からハウス掛けします。ハウス内の温度は萌芽開始までは高温となっても特に支障はありませんが、萌芽後は30℃を超えないように注意して、換気にも留意する必要があります。

自然発芽時期を過ぎてからの発芽抑制は大変に難しい問題ですが、日覆いや残雪の冷気を利用して自然発芽を抑える工夫が考えられています。

枝条によるふかし栽培

ビニールハウスを使って、集めたタラノキの枝条を25~30cmに切って穂木を作り、穂木の冬芽を温床でふかして新芽を開かせる栽培方法です(図-5)。ハウス内の温度・湿度を調整管理して行われます。

ふかし床の材料には、おが屑を使う方法と水に浸す方法があります。

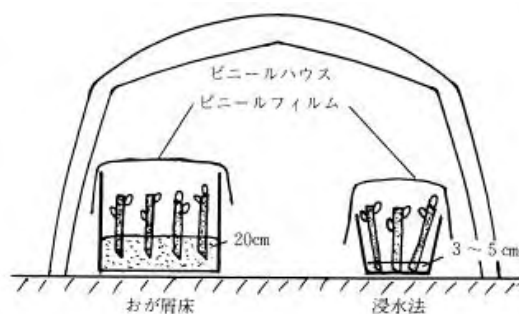


図-5 ふかし栽培

おが屑床の場合は、高さ50cmくらい

の枠を組み、底に厚さ20cm程度に粗めのおが屑を敷つめ、充分かん水して、穂木を差し込み並べます。穂木のおが屑床に深さ5~7cmくらいさしておさえます。さし床1㎡当たりさし込み数は太めのもので200~250本です。枠の上面をビニールフィルムで覆い、保温と保湿に努めます。

水浸法の場合は、ポリバケツなどの容器の底に深さ3~5cm程度の水を張り、穂木を立て込みます。水は2日に1回は取り替えて、昇温による水の腐敗を避けます。容器の上面はビニールフィルムで覆って保温と保湿に努めます。

ふかし栽培は、ハウス温度を昼と夜の変温管理で行うもので、日中25~30℃、夜間の最低10℃以上、床温が13~15℃の範囲を維持します。

2日に1回は散水して湿度維持に努めなければなりません。

若芽の伸長が進んで、長さ 7~10cm になったところで収穫します。伏せ込みからおおよそ 1 ヶ月で収穫が始まり、頂芽と側芽の収穫が終わるまでなお 1 ヶ月を要するでしょう。

ふかし栽培は高温・多湿となりがちで、病害発生のおそれがあるため、病害・障害に十分な注意をはらう必要があります。

このようなふかし栽培の利点は、促成による早出し、または抑制による夏出し出荷ができることといえます。

(主任林業専門技術員)